

# 神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

## コルタサルの作品における空白の考察

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-03-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Morikawa, Kaori メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1477">https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1477</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



## コルタサル作品における空白の考察

森川 香織

本論考は、アルゼンチンの作家フリオ・コルタサルの諸作品に見られるテキスト内の空白について論じたものである。

コルタサル作品の中でも、とくに短編については、“幻想的”と呼ばれることが一般的である。ツヴェタン・トドロフによれば、文学における幻想とは、「テキスト内で語られた超自然的出来事について、作中人物か読者、あるいはその双方が、合理的な説明をとるか超自然的な説明をとるかの“ためらい”を抱くことである」という。この観点から見ると、コルタサル作品で語られる奇妙な出来事については、合理的な説明が難しい一方で、それが妖精物語のような、現実からかけ離れた世界の叙述とも言えず、テキストに対して読者の抱く“ためらい”は、容易に解消しがたいものであると言える。

一方、コルタサル作品に対して読者が抱く“ためらい”の原因は何か、あるいは、なぜ彼のテキストは読者にそうした“ためらい”を抱かせるのか、という基本的な問題に目を向けると、彼の作品には不思議な出来事を引き起こした原因に関する説明や、そうした出来事が起こる経緯に論理的な因果関係が欠如しているからであると思われる。本論ではそうしたテキスト内における情報の不足、あるいは論理的因果関係の欠如を「空白」と捉え、それらをもとに作品の解釈を試みるとともに、最終章では、空白が読者に与える影響、また読者がそれに応じる形でもたらす作品への影響、すなわち作品と読者の相互作用を分析した。

論文全体は三部構成となっており、短編七篇と中編および長編小説各一篇をテーマごとに分けて考察している。

第一部「個人的運命の超越」では、『引っ越し』（1945）における実体なき他者、『山椒魚』（1956）と『夜あおむけにされて』（1956）における主客の転倒、『水底譚』（1964）における複数の登場人物の個性の曖昧さと、「algo」の正体をテキスト内の空白と捉え、それらの意味と作用を中心に作品の読解を行った。

まず、「変身」と題した第一章において、短編『引っ越し』と『山椒魚』を取り上げ、これらの物語に見られる主体から客体への移入という現象を詩的融即の観点から考察した。詩的融即とは、自己と“異なるもの”、すなわち“他者”の侵入を受け入れることにより、個人としての自己を乗り越える方法であることから、コルタサルの短編における変身は、個人的運命の超越を暗示していると思われる。

一方、『山椒魚』では、人間（主体）が山椒魚（客体）に変身した直後に二項間の立場に逆転が生じ、両者の間にふたたび断絶が生じる。このことは、単一の運命を共有しつつ引き裂かれた者たち、すなわちコルタサルが *figuras*（影）とよぶ他者（たち）と自己との関

係を表していると考えられる。

この点を踏まえ、「夢」と題した第二章では、『夜、あおむけにされて』と『水底譚』における夢と現実、および双方の世界に生きる自己と他者との類比関係に着目し、figurasによって受け継がれてゆく生の反復を、輪廻転生の思想と結びつけて論じた。異なる時空における運命の反復を描いたこれらの物語もまた、個人的で有限な生の超越を意図していると思われるが、とりわけ『水底譚』の結末で語られる「algo」(何ものか)は、原初的なものを示唆しており、ここに祖型の反復という図式を読みとることができる。

第二部「現実の二重性」では、『昼食の後』(1964)において代名詞の「lo」(それ)あるいは「él」(彼 / それ)で示される謎の“同伴者”、『動機』(1956)における情報の欠如と唐突に起こる文脈の飛躍、『バッカスの巫女たち』(1956)における盲人、および、『追い求める男』(1959)における主人公の不可解な言動をテキスト内の空白と捉え、それらの意味と作用を中心に作品の読解を行った。

「強迫観念と現実の変容」と題した第一章では、『昼食の後』における無知で野蛮な“同伴者”と、それを匿おうとして周囲に騒動を巻き起こしてゆく主人公とを対照し、良識や伝統に囚われるがゆえの狂気と、それによって引き起こされる現実の歪曲を指摘した。また、推理小説風に書かれた『動機』においては、ふたつの異なる文脈の関係性(主人公による犯人捜査と彼が巻き込まれた男女の三角関係)を分析し、“非合理的法則”による真犯人への到達を指摘するとともに、合理主義に対する作者の懐疑的な立場を明らかにした。

「現実の向こう側」と題した第二章では、『バッカスの巫女たち』における儀式的世界(本能的衝動から成る世界)と、そこに居合せた主人公と謎の盲人との対照的な立場を、ニーチェの説いた“アポロンのなるもの”と“ディオニュソスのなるもの”との相違と絡めて読解した。ここでは特に、“昆虫学者の分析眼”をもつために儀式的世界に参入できない主人公と、自己の殻を破って本能的世界と和解する盲人との対比を通して、合理主義者の無力が示されていると思われる。中編『追い求める男』では、時計の時間に代表される抽象的現実を嫌悪し、その向こう側に存在するであろう永遠を追い求める主人公の苦悩と抵抗を考察した。『バッカスの巫女たち』と同様、この物語においても、言葉や時間の裏側にある真実を追求する音楽家と、名声に執着し事実を偽る評論家との極端な対比が描かれており、両者の相違を通して現実の二重性が示されていると言える。

第三部『石蹴り遊び』における絶対の探求」では、長編小説『石蹴り遊び』(1963)の第一部「あちら側から」、第二部「こちら側から」および、73章以下「その他もろもろの側から」をそれぞれの章に割り振り、西洋的二分法と個人主義の伝統を克服し、絶対を探求する主人公の歩みを追った。

第一章では特に、主人公オラシオと恋人マーガとの関係、および“蛇のクラブ”の夜会の場面に焦点を当て、エロティシズムと多声的対話による儀式空間の形成を通して、相対性を乗り越えようとする主人公の試みについて論じた。第二章では、パリからブエノスアイレスに帰郷したオラシオが、旧友トラベラーに仕掛けるさまざまなゲームに隠された暗

示的な意味を解説し、遊戯を通した聖域の創造により、俗界の秩序を無化しようとする主人公の意図を明らかにした。第三章では、本書で用いられている実験的な手法と形式、および作者の代弁者として登場するモレリの覚書を分析し、読者との共犯関係によって作品を無限に甦らせようとする作者の意図を読み解いた。とりわけ、作品冒頭の「指定表」で示された無秩序な章の配列、および全 155 章から脱落した一章（55 章）は、固定された情報ないし説明を受け取るだけの受動的な読書とは逆に、自ら物語を創造していく積極的な読みの可能性を、極端な形で示したものであると思われる。

以上の考察から、コルタサルは諸作品に備わる空白、すなわち解答なき問や情報の欠落、および文脈の唐突な飛躍は、読者に違和感をもたらし、彼らを合理的現実の“向こう側”にある真実の探求に誘うための仕掛けであると言える。実験的な要素が盛り込まれた『石蹴り遊び』には、そうした空白を増幅させようとする作者の意図が明白に表れているが、実際には、非合理的なものとの出会いが直接的に表現されている短編において、むしろ空白はより大きく開かれていると言えるであろう。コルタサル作品を前にして読者が抱く“ためらい”は、“然るべきものがない”という不満や否定から生じるのであるが、作者はそうした空白を自ら埋めるよう読者に働きかけている。よって、彼のテキストに穿たれた空白は、創造的読書の可能性を開く契機としての機能をもつと結論づけられるであろう。